

鄂上語錄

第五卷

野上信生子全集

第五卷

岩波書店

野上彌生子全集 第五卷

第十一回配本(全二十三卷)

一九八一年四月六日 発行

定価三〇〇〇円

著者 野<sup>の</sup>上<sup>がみ</sup>彌<sup>や</sup>生<sup>ま</sup>子<sup>こ</sup>

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五  
電話 〇三二六五二二  
振替東京六二六四

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

©野上彌生子 1981

目次

目次

澄子	三
準造とその兄弟	五
お加代	一四
狂つた時計	一八九
キリストと祖父と母	二五三
夢	二七五
参 <small>しん</small>	二八九
茶料理	三〇三
一樹の蔭	三三三
真珠	三五一
後記	三八五

小  
說  
五



## 澄子

五つ六つになつて漸く物心がつきかけた時澄子が一番に意識したことは、自分の親は決して本統の父親でも母親でもないのだと云ふことであつた。この発見は普通の貰ひ子や継子の場合とは違つてゐた。皆んなが包まう／＼としてゐて、それでいつとなしに悟られた、と云ふやうな順序ではなかつた。寧ろ露骨に、あらゆる機会に彼女はそれを周囲の者から聞かされたのであつた。

「あの子の本統の親は東京にゐるのだぞ。——何んでもはあ偉え学者の代議士だちうこんだがなあ。」

「どんな偉え学者だか代議士だか知んねえが、自分の娘を何年も他人の家へ預けつ放して、里扶持一つ寄越さねえやうな人間が何になるづら。」

「学者や政治家ちう者は一体に金には縁の薄い者だで、あの子の親も大分困つてゐるのだあね。」

「お父さんがその調子だもんで東京ぢやいい氣になつてゐるんだぞ。この節ははあ、こつちから出した手紙にさへ、碌々返事も寄越さねえぢやねえか。」

これは澄子がお父さんと呼び馴れて来た老人とその総領息子とが、いつも小さい彼女に就いて話す

時の一例であつた。家にはその外に老人の連合のお婆さんと、三人の子供がゐた。而して澄子は老人を父親と呼んでゐたと同じやうに、そのお婆さんをば母親と呼び、三人の子供たちやまた総領息子をば兄さん、姉さんと呼ぶのに、何等の不自然をも感じなかつた。彼等が真実の親でも兄弟でもないことを知つた後とても、その親しみの情には変化はなかつた。そんなことでいぢけたり臆したりする隙のない程、彼女が懐き切つてゐたためでもあつたが、重なる原因は、皆んなが何んとか云ひながらも、家に生れた子供同様に彼女を可愛がることを忘れなかつたからであつた。澄子の実父の不誠実と忘恩を非難する総領息子でさへも、その怒を澄子に移すやうな無慈悲なことはしなかつた。

要するに、一家は年寄たちも子供たちも、揃つて人の善い涙つぼい性質なのであつた。その代り金は余りなかつた。数年前、遠縁の者で東京に出てゐる男から里子の相談があつた時も、丁度母親が四人目の子供から八年ぶりに思ひがけない産をして、子供は生れると同時に亡くなり、要らない乳だけ残つてゐると云ふ誂へ向きの事情であつたとは云へ、正直に云へば、子供について来る最初の三十円と、月々の仕送の十円に動かされたことは拒めなかつた。話が極まると、生れて五十日ばかりになつた澄子は、世話人の男に付き添はれて、一人の女中らしい女に抱かれて、東京から甲州の山の中の湖畔の村に來た。而してその女中の懷から今の母親の懷へ移されるとその儘、その貧しい百姓家の子供として育てられたのであつた。

世話人の男は極く手短かに赤ん坊の身の上を話した。彼女はその男が今抱え車夫として勤めてゐる



屋敷の主人の娘であるが、夫人の手前公然引き取れない義理があつて預けるのだと云つた。それで今後も子供に關しての交渉は、直接主人でなしに自分宛にして貰ひ度いと云ふことを堅く頼んで行つた。主人の名前は横井準造と云つた。偉い学者で代議士だと云ふことも、その時聞いたのであつた。百姓に似合はず文字を知つてゐて、山梨××新聞を近所から借りて読むにも、講談よりは先づ一二面から目を通すと云ふ風な老人の性格は、その一事に無関心ではゐられなかつた。さう云へば、たしかに横井準造と云ふ名前は、新聞の政事欄か何んかで見た記憶があると思つた。善良な老人は、斯うして見も知らぬ里子の父親に対して、深い尊敬の念を持つと共に、そんな名士の子供を自分の家で育てると云ふことに、無邪気な名譽を感じてゐた。それ以上の楽しい夢想をさへ抱いてゐた。彼はその娘を美しく育て上げた後で、自分の手で彼女をその父親に引き渡す時の厳肅な晴れがましい一と場をよく描き出して見た。——偉い学者で代議士がおれに頭を下げてお礼を云ふのだ。お蔭で立派な娘になつたと云つて悦んで呉れるのだ。どんな御恩返しでもしようと思ふのだ。——飛んでもねえこんだ。そんな事をして貰つちやならねえ。此方は何も愆徳づくで世話をした訳ぢやなし、ただあの子が可愛い、また可哀想なもんだ、と思へばこそ育てたんだから、と斯う潔白に出なければならねえ。——實際またさうなんだからな。全く可哀想なもんだ。ちゃんとした親があつて、その親の傍で大きくなれねえと云ふのは、よくよくあの子も不運な生れだて。——だが、死ぬまでの話になる。二頭馬車ちうものゝ一に乗せてくれんかなあ。そんな時でもなけりや一生及びもつかんことだて、何んにも外にお礼は

要りましねえ。ただ一遍だけ二頭馬車ちうもんに乗せて、東京ぢうの町を引きずり廻して下さい、と云つたらどんなもんづら。——いや、待てよ、旦那の家にや、まだ馬車があるちう話は聞かねえだぞ。さうだ。幾ら東京でも馬車となりや、華族様か大臣方が大金持でもないときさうく持つてもゐまいで、この望だけは駄目かな。それなら、議會を傍聴して下さい、と斯う云ふだ。丁度その時分に娘を連れて行くとしてな。それが一番だ。それなら旦那にやお手の物だ、大威張で議會の見物が出来ると云ふもんだ。——

けれどもこの夢想は長くは続かなかつた。実父は極端に冷淡であることが分つた。ほんの極まつた仕送以外には、彼等はその預り子に対して、彼から何等の親らしい愛情のしるしをも受取ることとは出来なかつた。その内に金が滞り出した。世話人の男は間に立つ自分の心苦しさを訴へながら、二三ヶ月置にやつと一と月分の金を送つて来た。その状態が一年余続いた後、今度はすっかり送金が絶えてしまつた。催促の手紙には附箋がついて歸つた。世話人の男はもうその家にはゐないのであつた。田舎では怒つたり、溜息をついたりした末に、思ひ切つて実父の横井氏に交渉する事に決心した。老人は自分でもその位の手紙は書ける自信を持つてゐたのであつたが、大事を取つて村の小学校の先生に頼むことにした。云ふだけのことは何処までも云つてやり度いが、併し失礼にならないやうに、先方を怒らしては呉れないやうにと云ふ注文で書いて貰つた。老人はこの場合になつても、まだ東京の名士に対する幻影を捨て切ることが出来なかつたのであつた。それ故、折り返して横井氏から返事が来

た時には彼は胸を躍らした。手紙は簡単であるが、冷淡ではなく、寧ろ率直な書き方で、自分は今或る事情で経済上非常に困つてゐるので、心外な違約をしてゐるが、どうか今少し待つて貰ひ度い。屹度一度は貴下の御厚誼に報いる日があると思ふと云ふ意味が肉太な達筆で書流してあつた。それを讀んだ瞬間、二頭馬車と帝国議会がまた繋り合つて老人の円く禿げかけた頭の中を駈け去つた。彼はすつかり感激してしまつた。横井氏に対する反感も怒も、また当てにしてゐた仕送の金の来ぬ失望も、さう云ふ人から斯んな打ち明けた手紙を貰つたと云ふ満足で償はれた気がした。彼はいつか甲府にも出た時、横額になるやうに表装させよう、と云ふ欲望に駆られながら、大事にその返事を手文庫の中にしまつて置いた。が、この際、老人は感激の余りに一つの大事なことを忘れてゐた。——手紙は甲府で横額に仕立てようが、またその儘手文庫にしまひ込まれてあらうが、要するにいつまでも手紙であつて、決して食べ物でも、着物でも、穿物でもないことと云ふことを忘れてゐた。

三つ四つになると澄子はもう乳で育つ訳には行かなかつた。殊に一日表で駈けずり廻つて遊んでゐるので、食べる物も一人前の子供ほど食べ出した。着物は尚ほ困ることであつた。初めに持つて来た三四枚は形もなくなつてゐた。東京からは前掛一つ送つて来なかつたので、後は全部此方で着せなければならなかつた。それも、杜絶え勝でもまだ仕送のあつた内は、都合がついたが、今の状態となつては、どうにも仕方がなくなつた。お婆さんは今更のやうに東京の親たちの無情と義理知らずを罵りながら、皺くちやの、小さい鼻の先に眼鏡を乗せて、上の兄たちの着物——それも足らぬ勝の着古し

から、はいだり、ついだりして漸く彼女の一枚を作り上げた。澄子は女の子らしい赤い物などは殆んど着たことがなかつた。――上が、男の子ばかりであつたから。いつも色のさめた紺紵の、だぶくした寸法違ひの着物にくるまつて、手足を土だらけにして表から飛び込んで来ると、直ぐねだつた。

「おらに芋お呉れ。腹が減つたよ。」

彼女はまた傍の湖水べりで遊んでゐては、よく水にはまつて帰ることがあつた。

「あつ、また着物を濡らして来たぞ、この子は。どうする積りづら。着換えもねえだに、ほんに困りもんだ。」

お婆さんはくしゃくして、涙を流しながら怒つた。またその度に東京の親に対する不平と愚痴が繰り返された。併し今となつてはどうもしやうがなかつた。澄子はお婆さんに取つてもお爺さんに取つても、既に手放せないものとなつてゐた。――斯うしてまた二年間。この可愛い厄介者は、一文の報酬も払はないで、気の毒な年寄夫婦から乏しい食料を奪ひ、面倒な保育の手数と共に愛撫を窃んで平気でゐた。その時分、澄子が一番怖ろしかつたことは、東京に帰されると云ふことであつた。分らないことを云つてぐずつたり、云ふことを聞かなかつたりすると、屹度それで脅された。

「ほら、可い加減によさねえと、東京のお父さんのところへ帰すだぞ。明日兄さんが船津へ行く時、おぶはしてやるだ。」

この一言は澄子を震ひ上らせた。彼女はどんなに激しく泣いてゐても忽ち泣きやんで、年寄たちの

脊中にかじりついた。

お爺さんは、でもその二年間は東京への交渉をまるで打ち捨てて置いた訳ではなかつた。彼は二三度、今度は自分で書いた手紙を出した。最初の一通に対しては、ペンで走り書をした当座遁れの葉書が来たが、後の手紙には何の返事もなかつた。その内居所が不明になつた。彼の属してゐる政党の用事で、外国へ行つたらしいと云ふ噂が、例の小学校の先生から伝はつた。それとても確かなことは分らないのであるが、どちらにせよ、横井氏が今までの本郷区曙町十三番地の家にゐなくなつた事だけは事実であつた。お爺さんは途方に暮れた。

且つその二年間は、老人の一家に取つても、また村全体に取つても容易ならぬ心配事の起つた年で、結果は、その小さい里子一人の扶養を、以前に倍する重荷にして行つた。一体にそのS——村は甲州の湖水地方に散在してゐる多くの小村の代表的な一つで、富士山が真正面に聳えて、その下に湖水があつて、非常に景色が美しいと云ふ以外には、何等の取得もない寒村であつた。堅い熔岩を地盤にしてゐる土からは、馬鈴薯と数種の野菜きり取れなかつた。その乏しい生産物を作り出す畑さへほんの少ししかなかつた。湖水の三方は二千米突を限度とした青い山々で囲まれてをり、残つた一方も、同じやうなごつくした熔岩の森林地帯で、鋤を打ち込める場所はなかつた。富士山は丁度その森林の上から聳えてゐた。斯んな訳で、住民が僅かに探し出した土地とても、山の間々の、狭い窪地に過ぎなかつた。彼等の蔦色の草屋根が五六十戸かたまつて形づくつてゐる村と云つても、云つて見れば、

窪地の稍打ち開けた一つに過ぎなかつた。

質素な生活に甘んずることが、第二の天性になつてゐるとは云つても、住民は馬鈴薯ばかりで生きて行く訳には行かなかつた。またその馬鈴薯とても、彼等の一年中の食料の外に、着物や小使錢まで保証することは到底出来なかつたので、彼等は農業以外に何等か他の仕事が必要であつた。何処でもするやうな炭焼や養蚕は彼等も勿論した。けれどもその村には今一つ別な仕事があつて、畑の事などは皆んな女や年寄に任せて、全村の男の八割がその仕事に従事した。それは蚕の糸取に使ふ粹を作ることであつた。彼等はこれを、湖の周囲の山や森林から伐り出す檜で作つた。堅い地盤の上に生えて、育ちが遅く、従つて木肌の飽くまで細かいその木材は、蚕の糸粹としては何処の檜も及ばない最上なものとせられてゐた。彼等はこれを隣国の蚕業地に送り出した。而してその工賃を以つて田畑の不足を償つてゐた。伝習的なこの仕事は、長い間に村の家々の構造まで変へた。S——村の家は、一棟だけは普通の百姓家の通りであるが、今一棟は屹度右か左に小さい翼が附いて、坪庭の中に突き出している。大抵三疊か長四疊位な疊敷で、それが仕事場であつた。而して天気の良い日には前の庭には豆の莖干や、鶏小屋や、一寸とした青物の寄せ植などに交つて、二寸角位に挽いた約一尺ばかりの檜の木片が、高く井桁に組まれたり、小さい尖塔に積まれたりして日に乾かされてあつた。

丁度その頃であつた。県の当局者は湖水地方の美しい景色を保護するために、湖の周囲の樹木を保安林とする計画を立てた。S——村のS——湖も元より撰択を遁れる筈はなかつた。けれども、周囲

の山々の所有に就いて、新たな委しい調査が始まつた時、村の者は方針がよく飲み込めなかつた。何とか云つてまた税金でも上げる積りづら位にしか考へなかつた。それ故持つてゐる場所も持つてゐないやうに云はうとし、さう出来ない人たちでも、事実よりは幾割も少く申立てた。お上の帳面の上さへ遁げて置けば、後はお互ひ同士でどんな方法でも取れる。——實際、今までは梟の所有の森でも、梓の材料を伐る位は誰からも咎められたことはなかつたので、その点は彼等は極く呑気に考へてゐたのであつた。

結果は一村を喫驚させた。税金は増さなかつた代り、彼等は官有林に斧を入れることが出来なくなつたのは勿論、湖水に臨んだ部分は、たとひ自分の所有地でも、風致上その樹木をば決して自由にすることが出来なくなつた。これは大きく云ふと村の死活問題に關することであつた。云ふまでもなく、兎角美しい景色は見て楽しいが、美しい景色では彼等の食料にはならなかつた。尤も今少し東京に近くて汽車でも便利のよいところならば、東海道辺の多くの遊覽地のやうに、別な割りのよい収入の道も開けて、彼等は荒地の馬鈴薯を心配したり、安い工賃で終日糸梓を拵へたりしなくてもすんだか知れない。けれども此の土地にそんなことは望まれなかつた。夏になると、それでも幾らか旅行者が来たが、大部分は糸だてを着たり、テントを持つたりした学生ばかりで、村に落して行くやうな金は初めから持つてゐなかつた。さうでないものは殆んど外国人であつた。これは四季を通じて可なり的人数であつた。併し、彼等は村から湖水べり伝ひに小一里もある対岸の岩の上に、同じ外国の帰化人が

別荘代りに建てたホテルへのみ泊つた。またそのホテルが村へ支払ふ金は馬鈴薯の代金より外にはないと云ふやうな事情で、平常から村はホテルによい感情を持つてゐなかつた。その上内地のそんな偏僻な山の中に家を建てるほどの帰化人の自然癖は、彼等には到底理解されないものであつた。湖面にさし出た枝ぶりのよい一本の松を伐り倒したことから、曾つて村民と大喧嘩までしたホテルの主人は、彼等から見れば半分狂人であつた。其処へ今度の保安林問題が持ち上つたので、村民は彼等らしい自然な当推量をした。

「大方これもあの氣狂ひ毛唐の目論んだ仕事づら。ホテルの周りが裸山になつちや、商売ははあお仕舞ひになるで。ふん。ホテルが何んだ。」

その繁昌が自分たちに何の關係があらう。——彼等は斯う思つた。県の処置を恨むと共にホテルをも憎み怒つた。あの毛唐屋敷を焼いてしまへとまで息捲く者さへあつた。併し最後には矢張り諦めた。彼等は溜息をつきながらも再び勤勉に働き出した。もう湖水の周囲の樹木は使はれなくなつたので、彼等は険しい森林を横ぎつて、遠く数里の向ふにある富士の麓の高地まで材料を伐り出しに行かなければならなかつた。又湖の窪地に手入れをすれば今少し馬鈴薯の取れる場所があつても、畑にすることは出来なかつた。斯うして彼等の住む世界をいつまでも美しく保たうとした法令は、村民の労力を数倍し、彼等の家の生活を段々と苦しくする結果になつた。

お爺さんのところとても、一般の不幸な例に洩れることは出来なかつた。家は澄子の来た頃よりも



ずつと貧しくなつてゐた。不足勝な食物と着物がいよ／＼一家の真剣な問題となつた時、人々の心の中には忘られてはゐないが、常は愛情で蔽ひ隠されてゐたもの——うちには余計な者が一人あると云ふ考が、湧き上らないではすまなかつた。これまでとても、彼等は露骨にその事は云ひもし、他人にも愚痴をこぼした。小さい本人にさへづか／＼云つて平氣であつた。が、今度は様子がすつかり違つてゐた。皆んな同じ言葉を舌の先へ載せてゐて、口に表はすのを憚り合つた。一度云ひ出してしまつたら、もう取り返しのかかぬ事になりさうな氣がしてゐた。彼等は忌々しく、腹立たしかつた。この厄介者がと思ひながら、それで先よりも一層可愛がらないではゐられなかつた。殊にお爺さんとお婆さんは、馬鈴薯の一つでも誰よりも多くその余計者にやらうとした。

が或る日、総領息子は終に澄子を東京へ帰すことを云ひ出した。

「あの子の不惑なのは、そりや誰も同じこんだが、斯う暮らしがえらくなつちや、お父さんも一つ考へて見ることだな。第一、斯んな田舎にいつまでもゐたんぢや、澄子のためにもならねえこんだで。」

「それだてお前、親の居所も分らねえで、あんな子供を何処へ帰せるだあね。何にもおらがあの子を引き留めて置く訳ぢやなし、帰さうにも帰す手筈がつかねえぢやねえか。」

「おらさうは思はねえな。お父さんがその氣にさへなりや、向ふは世間にも名の知れた人ちうで、探して分らねえ筈はないづら。」